



世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる!

日本も元気にする 青年海外協力隊

国際貢献で培われた力をいざ、
北海道で



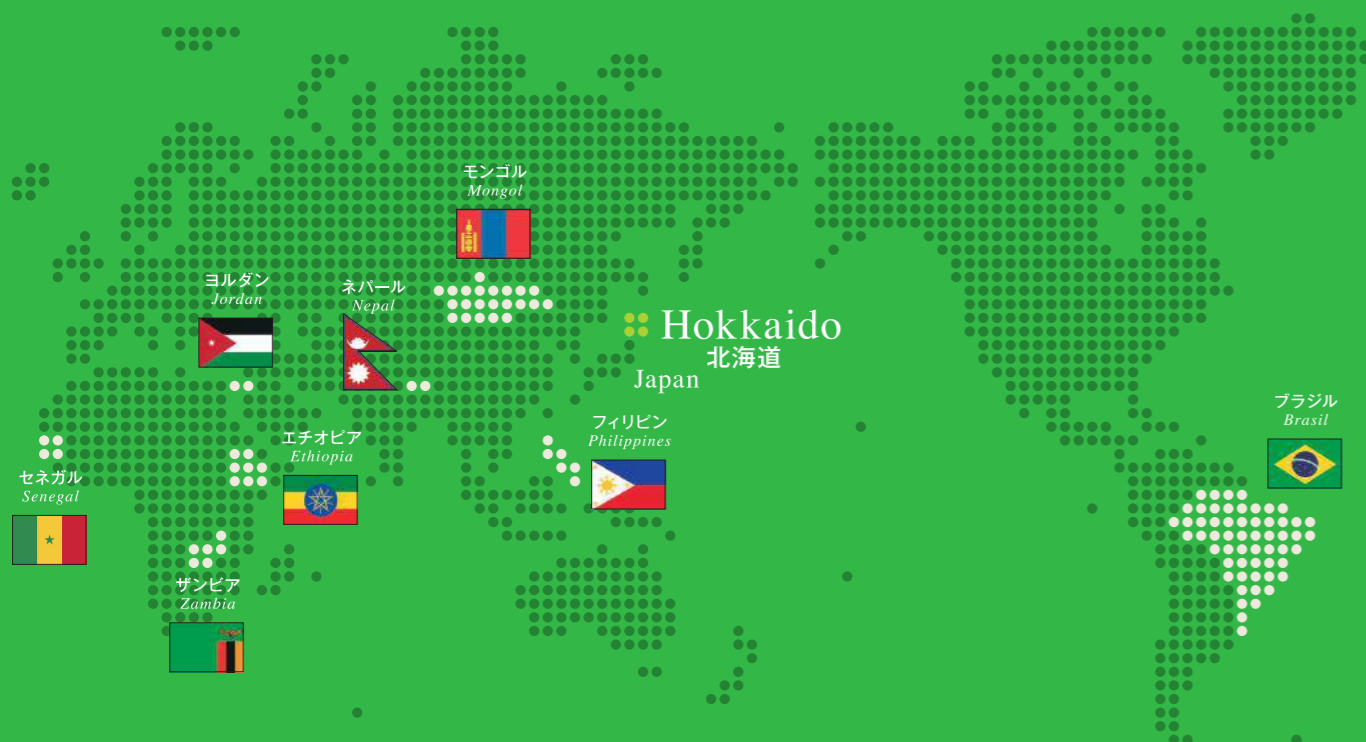
その経験を北海道で活かし

開発途上国の課題解決に取り組む青年海外協力隊は、
“特別なひとたち”ではありません。
ほんのささいなきっかけや素朴な疑問から視線を海外に伸ばし、ためらいながらも
その一歩を前に踏み出したひとたちです。

北海道から送り出した青年海外協力隊は現在約2,000人。
これから紹介する8人も、日本では得られない貴重な体験に彩られた2年間を経て、
晴れやかな笑顔で再び北の大地に戻ってきました。

彼らのものがたりを次に受け取るのは、あなたの番。

帰国後に見えてくる北海道や日本の風景が大きく変わる
成長のチャンスを、その手につかんでみませんか。



その経験を日本の未来へつなげる

INDEX

P 03



釧路市役所総合政策部 市民協働推進課 国際業務調整員

小竹 一嘉さん
Kazuyoshi Kotake

赴任地 ▶ セネガル

P 05



JICA北海道 国際協力推進員

藪 たかねさん
Takane Yabu

赴任地 ▶ ブラジル

P 07



千歳市保健福祉部 福祉課 総務係 主任

山根 伸隆さん
Nobutaka Yamane

赴任地 ▶ エチオピア

P 09



田中農場(自営)

田中 真生さん
Saneiki Tanaka

赴任地 ▶ フィリピン

P 11



日本ルクソールシステム 株式会社 プログラマー

吉田 祐次郎さん
Yujiro Yoshida

赴任地 ▶ ネパール

P 13



津別町立津別中学校 教諭(英語)

渡邊 美希さん
Miki Watanabe

赴任地 ▶ ザンビア

P 15



北海道真駒内養護学校 教員

斉藤 育さん
Iku Saito

赴任地 ▶ ヨルダン

P 17



北海道新聞社 浦河支局 記者

斉藤 徹さん
Akira Saito

赴任地 ▶ モンゴル



小竹 一嘉

Kazuyoshi Kotake

赴任地



セネガル

赴任地での職種
(活動分野)

村落開発普及員
(現「コミュニティ開発」)

現在の勤務先・職種

釧路市総合政策部
国際業務調整課
市民協働推進課

北海道釧路市生まれ。東京国際大学卒業後、1997年から3年間、在外公館派遣員として在カメルーン日本国大使館勤務。2000年に青年海外協力隊参加。JICA国内協力員、民間企業を経て、2006年からJICA企画調査員(ボランティア事業)としてニジェール、ガボン、タンザニアで勤務。2015年に帰国し、2016年4月から現職。2017年3月、社会福祉国家試験合格。

アフリカでの国際協力経験を 現在、生まれ故郷にて実践中



10年の準備期間を経て、念願の協力隊に参加

私が青年海外協力隊の存在を知ったのは、高校1年生の英語の授業でした。自ら進んで開発途上国という困難な環境に身を置き、現地の人たちと同じ言葉で、同じ目線で活動している日本人がいることを知り強い衝撃を覚えました。それ以降、自分も世界を舞台にした生き方をしてみたい、と思い始め、青年海外協力隊への参加が大きな目標の1つになりました。

その後、国際関係が学べる大学を志し、部活(サッカー)と新聞配達と勉強をなんとか頑張り、

大学に進学。大学3年修了後、英語力向上と異文化体験を積むため、自らの意志でワーキングホリデー制度を利用しオーストラリアへ渡りました。初めての海外暮らしはカルチャーショックの連続でしたが、この時にチャレンジすることの大切さを学び、外国の人々と接するための免疫ができたのだと思います。卒業後、在外公館派遣員試験に合格。カメルーンにある日本大使館で3年間勤務したのち、青年海外協力隊試験に挑み、めでたく合格。10年越しの夢が叶った瞬間でした。

赴任地で 感じたこと

仕事も暮らしも 現地の人々と同じ目線で

村落開発普及員としてセネガルに派遣され、首都ダカール郊外にあるスラム地域において、区画整備等再生事業を実施する国家プロジェクトチームの一員として活動しました。赴任当初はフランス語と現地語(ウォロフ語)を両方覚えていくのが大変でしたが、焦らずコツコツ語学の研鑽に励みました。同チームの住民組織化班

に属し、地域住民との信頼関係を構築しながら、彼らが抱える課題と一緒に把握していき、ともに解決のために取り組みました。会議を始める際にはイスラムのお祈りを一緒に行い、金曜日には彼らと同じ長い民族衣装に身を包み、ラマダン時期には彼ら同様、日中絶食するなど、彼らの文化・慣習を理解するよう努めました。



現地では様々な伝統行事に参加(※仮装も)

最初は彼らから「よそ者」として映っていた私でしたが、現地語の習熟とともに半年後には「仲間」として迎え入れられるようになり、活動も軌道に乗っていききました。試行錯誤しながら、彼らと一緒に汗を流した植林活動などの経



(上) ホームステイ先の子どもたちと(現地語学訓練期間中)
(下) 現地体験訓練でお世話になったモニヤレル村の人たちと

験は、その後の私にとっても大きな財産となっています。

青年海外協力隊を目指す みなさんへ

協力隊での経験は、あなたの価値観を豊かにし、あなたを人間的にも成長させてくれるものと確信しています。人生は一度きり。興味や関心があれば、ぜひ一歩前へ踏み出してみてください!



隊員経験後、さらに3か国で JICA専門家として「人づくり」



アフリカでの開発支援にやり甲斐を強く感じた私は、協力隊参加後も関連した分野で仕事を継続したいと考えていました。その時、ちょうどJICA国内協力員の募集があり応募。1年間JICA北海道(帯広)で勤務し、道東におけるJICAボランティア関連業務を経験させていただきました。

その後、協力隊で知り合った女性と結婚。妻の理解もあり、青年海外協力隊等JICAボランティアを現地でサポートするJICAボランティア調整員(当時)を目指すことにしました。最初の挑戦で合格し、ニジェール、ガボン、タンザニアの3か国で計8年間、各国の開発課題に沿ったJICAボランティアの案件形成を行い、派遣されてきた志高いボランティアの活動支援・生活支援を行って来ました。開発途上国という未知なる世界で奮闘し、成長するボランティアたち。素晴らしい彼らに出会えたことも私にとっての大切な財産となっています。



再び生まれ故郷にて 「今できること」を実践中

タンザニアで充実した日々を送っていた2014年、父が急逝し、家族とともに生まれ故郷で再出発することを決意しました。翌年JICAとの契約を終え帰国し、母、妻、2人の子、妹と一緒に幸せに暮らしています。今の日本が失いかけている家族の大切さ、地域のつながり、人と人のつながりが何より大切だとアフリカでの日常から感じることができたので、今はそれらを少しずつ実践に移しています。

現在は釧路市の国際業務調整員(嘱託職員)として地域の国際化および多文化共生の推進等に寄与する傍ら、所属している釧路国際交流の会会員として市民レベルの多文化共生等の活動にも携わっています。また町内会役員、民生委員・児童委員、消防団員としても活動している他、まだ出動には至っていませんが防災士、国際緊急援助隊・医療チーム(医療調整員)にも登録し、再び生まれ故郷にて、充実した毎日を送っています。



くしろ国際交流プラザでアフリカについて語る小竹さん

藪 たかね

Takane Yabu

赴任地



ブラジル

赴任地での職種
(活動分野)

日系社会
青年ボランティア
(日系日本語学校教師)

現在の勤務先・職種

JICA
国際協力推進員
北海道
(旭川)

北海道帯広市生まれ。静修短大(現・札幌国際大学短期大学部)を卒業後、社会人経験を経て2002年2月から2004年2月までブラジルに赴任。帰国後は小学校教員免許を取得。愛知県の公立小学校に勤めた後、結婚を機に旭川に移住。2017年2月から現職に。

今度私が 皆さんの背中を押す番です



国内で日本語教育の実務を積み、二度目で合格

父が農業指導で開発途上国に行っていたため、海外に目を向けるのは早かったと思います。国語が好きで、短大の先生に「日本語教師になりたい」と相談したら大卒資格の取得とJICAを勧められました。ある日、新聞の片隅に日系社会青年ボランティア説明会の広告を見つけて、喜んで話を聞きに行きました。

ところが日系社会青年ボランティアの日本語教師になるには、実務経験や社会人経験2年以上が望ましいと判断。短大を卒業後、事務職で

働きながら通信教育で4大卒の資格を取って応募しましたが、一度目は残念ながら不合格。実務不足を痛感して指導場所を探しまわったところ、江別国際センターで中国からの帰国者や酪農学園大学に通う留学生の方々に指導する機会を与えていただき、二度目の試験に合格することができました。実務を通して「やっぱり日本語教師は楽しくてやりがいがある」と再確認できたことも、赴任への気持ちを高める弾みになりました。

赴任地で 感じたこと

8歳が『天城越え』を歌う？ 孫と祖父世代の橋渡しも

私たちの配属先は、ブラジルに移住した日系人社会の方々です。現地の学校とは別に日系団体が運営している日本語学校で、3歳から18歳までの主に日系3世に日本語と日本文化を伝える活動に従事しました。日系3世ともなるとポルトガル語のほうが流暢で、日本は異文化の国。若い世代に日本のことを知ってもらいたい

という一世、二世の方々の熱い郷土愛を感じました。夏休みに「歌」という漢字を使って文章を作る宿題を出したら、8歳の女の子が「カラオケで『天城越え』を歌った」と書いてきて(笑)。明らかにおじいちゃんから知恵を借りたようですが、それもまたプラスアルファの価値を生んだのかも。「孫と日本語で話せるようになった」と、うれしい言葉をいただくこともありまし



ブラジルのピラル・ド・スール日本語学校。音楽や体育など幅広い授業を行った。



日系社会で毎年開かれる「盆踊り大会」に浴衣で参加するブラジルの子供たち。

日系社会青年ボランティアを目指す みなさんへ

「国際協力に興味がある」時点で、あなたはすでに国際協力の最初の一歩を踏み出しています。世界のどこかにあなたを待っている人がいます!



教育現場で経験を活かし 五輪支援のイベントも企画



ブラジルで日本人がいかに恵まれた教育環境にあるかということに感銘を受け、日本に戻ってから小学校教員の免許を取りました。外国人労働者が多い愛知県の公立学校でブラジル人児童たちを教える仕事が見つかり、2年間勤務しました。教科書独特の文語表現は口語体とは異なるもの。国語や数学などの問題自体を読み解くことに苦戦している生徒たちを指導しながら、日本の国内にいても多くの「外国人とのつながり」があることに気づくことができました。

旭川に移住後しばらくは子育てに専念していましたが、2016年のリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックにあわせてブラジルに関する食育講座やパネル展を自主企画し、JICA旭川デスクに相談に乗ってもらうようになりました。国際協力推進員のポストが空いて応募できたことは、本当に幸運だったと思います。



新しい自分に成長 国際協力の種を蒔く

ブラジルの2年間は、私の初めての一人暮らしでした。初の和太鼓、初のゲートボール、学芸会の劇のシナリオを書くのも朝3時に集合して遠足に行くのもなにかもが初めてづくし。日本では決してできなかったことをたくさん経験させてもらい、おかげで人の話を聞くことが好きになった自分があります。職員室に夜食を持ってきてくださったりして、本当に大切にいただいた感謝の毎日でした。

現在の仕事は、青年海外協力隊等JICAボランティアの応募相談や出前講座を行うほか、地域の国際協力に関わる情報提供をしています。国際協力は決して敷居が高いものではなく、「自分にできることは何か」を考える種をたくさん蒔くのが私の目標です。いずれは出前講座を聞いた地元の小中高生たちが国際協力の場で活躍してほしいと考えています。



市民やNGO、企業などさまざまな訪問者とJICAをつなぐ地域窓口を担っている。

山根 伸隆

Nobutaka Yamane

赴任地



エチオピア

赴任地での職種
(活動分野)
理数科教師

現在の勤務先・職種

千歳市保健福祉部
福祉課 総務係 主任

北海道札幌市生まれ。北海学園大学卒業後、2006年6月から2008年6月までと2008年10月から2009年3月までの2度に渡ってエチオピアに赴任。帰国後教職を経て千歳市役所の求人（JICA経験者枠）に応募し、2016年4月から勤務。

自分から動き出せば
必ず《科学反応》は起こる



エチオピア中高生に理数科教育を促進

大学4年で中学・高校の数学教育免許を取ったあと、「就職前に世界を見てみたい!」という気持ちが高まり、青年海外協力隊に応募しました。家族のなかで海外に行くのは、私が初めて。両親は「楽しんでおいで」と送り出してくれましたが、後から聞けば行っている間、母親が私が病気になった夢を見たらしく、ちょうどそのころ本当に体調を崩していたので互いに通じるものがあったのかなあ、なんていうこともありました。

赴任先はエチオピアの首都から北東に120km行ったところにある町デプレベルハン。中学・高校の理数科教育の促進が目的でした。現地では教科書と教育番組を使って生徒に理解を促すというやり方でしたが、電気の供給が不安定なため、日によっては停電でテレビが使えないことも。それならば簡単な実験を導入することで授業も進む、生徒もより関心を持ってくれると思い描いていましたが、現実はその簡単にはいきませんでした(笑)。

赴任地で感じたこと

授業のボイコットをバネに 自分にできることで貢献する

現地の言葉は、日本ではなじみがないアムハラ語です。相手の性別や人数によって語尾変化する単語を覚えるのになり苦労しましたが、任期の後半、子どもたちや近所の人たちと気軽にアムハラ語で会話できるようになったときは本当にうれしかったです。



簡単な実験でも目の前で見せることで効果大。食い入るように見つめる生徒たち。

赴任当初は言葉の壁が厚く、また私も教職の実務経験がなかったため実力不足だったのだと思います。実験の面白さを伝えようとしても私のつたない英語を同僚の先生がさらにアムハラ語で通訳するまわりくどさや、教科書に載っていない内容を教わることに、生徒たちが違和感を覚えたのかもしれない。じきに授業をボイコットされてしまい、「このままではダメだ」とおおいに反省しました。それからは私はサポート役に徹し、同僚の先生ができるような簡単な実験を提案し



2度目の赴任では教師対象の実験教室でノウハウを伝えた。

たり、校内のPC環境を整備するほうに方向転換。正直悔しかったのですが、“自分にできること”で貢献できる道筋を探しました。

青年海外協力隊を目指す みなさんへ

「世界は日本だけじゃない」ことがわかれば、互いのいいところも悪いところも見えてきます。現地で感じる匂いや味わいを思う存分楽しんで!



セカンドチャンスで 次代につなぐ環境づくり



実は、帰国後すぐに「もう一度エチオピアに行かないか」というお話をいただきました。今度はアムハラ州の教育局からの招きで、理数科教育に本腰をいれるので現地の実状がわかる隊員に来てほしいという依頼でした。一瞬悩みましたが、結果は2度行って本当によかった。アムハラ州の州都バハルダールの小学校を拠点に先生方を対象にした実験教室を開き、さらに簡素ではありますが校内にラボラトリーを作って後任の協力隊員がやりやすいような環境を整えることができました。

家族には「また行くの!」と驚かれましたが、自分が必要とされていることに応えたかったですし、一度目の経験を活かす場を与えてもらったことで最終的には大きな達成感を得ることができました。アムハラ州の理数科教育はきっと今も盛り上がってくれていると思います。



ピンチに動じず 一步でも前へ

日本に戻ってからは道内外の教育現場で経験を積みましたが、じきに行政に関心を持つようになり、運よく千歳市役所が新設した「協力隊経験者等」の受験区分で採用されました。二度目の赴任で行政のサポートの重要性を肌身で感じたことも、頭の片隅にあったと思います。いまは入所1年目なので、千歳市独自の「あったか灯油事業」の普及や戦没者遺族の方々の対応など福祉全般に関わる仕事を覚えている最中です。

協力隊経験で身に付いたことは、ピンチをピンチと思わない姿勢でしょうか。わからないことは迷わず周囲の方々に相談して、少しでも前に進む努力をしています。向こうでは川で洗濯するのも「大変だな」と思わず、皆と一緒に楽しむことができました。そういう価値観を現地の人たちと共有できた時間は、自分にとって大切な財産になっています。



「カウンター」対応やイベント企画・運営など幅広い福祉業務を経験中。

田中 真生

Saneiki Tanaka

赴任地



フィリピン

赴任地での職種
(活動分野)
家畜飼育

現在の勤務先・職種

田中農場(自営)

親子二代の酪農場を フィリピンとの交流拠点に

思わぬ赴任先フィリピンに今では“里帰り”

小学生のときからボランティア活動になじみがあり、将来の夢は「アフリカでボランティア活動すること」。赴任希望地もアフリカ一筋でしたが、いざ決まってみるとフィリピンでビックリ！どうやら健康診断で白血球の基準をクリアできず、農業大学に通っていたこともあってフィリピンのセブ島へ。国家農業省酪農局のもと、フィリピン国内の牛乳生産拡大を目標に担当エリア内の農家を巡回し、セミナーや実演講習、技術指導を行いました。

現地語はフィリピンの第三言語であるビサヤ語です。英語が苦手だったので覚えるならこっちだと思い、頑張ってビサヤ語をマスターしました。帰国後にビサヤ語でフィリピン人と話したら「こんな日本人は初めてだ」と驚かれました。私の名前のサネイキは発音しづららしく、皆にサネイと呼ばれていました。今もフィリピンに“里帰り”をしたら「サネイが帰ってきた！」と歓迎してくれるのが、この上ない喜びです。

北海道豊富町で埼玉県出身の親が始めた酪農家の次男に生まれる。北海道立農業大学校在学中に2010年10月から2012年10月までフィリピンに赴任。帰国後同大学に復学・卒業。民間企業を経て2015年10月から実家に就農。34頭の乳牛を飼育する。

赴任地で 感じたこと

健やかかつ持続可能な 乳牛の飼養環境を整備

主な指導内容はミルカー(搾乳機)の使い方や洗浄方法、フィリピンの乾期でも現地の素材でサイレージを作る方法など。日本では当たり前になっている牛の爪の削蹄も、放っておけば牛の姿勢が悪くなって繁殖障害につながり、削蹄に

よって牛が長生きすることなども各農家に説明して回りました。牛を木につないでいただけだった牛舎にベッドを作る作業は、自分が帰ったあとも浸透していると聞いてうれしきぎりです。

協力隊の受け入れに慣れている赴任地では「自由にやってください」と任せられる分、前任者と比較されることもあり、自分の存在感をアピールすることが大切です。積極的に現地語を覚えたのもそのた



朝、書類仕事を済ませてから農家を巡回。ときには泊まり込みで指導することも。



めですし、イベントに参加したりセブ大学で柔道を教えたりして、とにかく現地でのコミュニケーションを増やすことを心がけました。当初は衝撃を受けた虫入り野菜スープも後半は残さず完食(笑)。度々、地元の人々と間違われたのもいい思い出です。



青年海外協力隊を目指す みなさんへ

我々は協力隊に参加して変わりましたが、もともと心の中に既存の枠を飛び出したい願望が落ちていたはず。あなたもその一人です。応援しています！



異業種経験で就農を決心 現地の若者を受け入れたい



日本に戻り大学を出てからは、多角経営の一環として農業に乗り出した造船会社や協力隊の先輩が立ち上げた介護関連の会社に勤務しました。農業以外の分野に触れて視野が広がり、同時に協力隊経験がアウトプットできる就農への決意が固まりました。27歳から実家の酪農を手伝い始め、現在親が不在のときは弟と一緒に農場を切り盛りしています。

農業の道に進む気になったのには、フィリピンで現地の農業事情を学び、貴重な人脈を得たことも影響しています。将来的には任期中に関わったフィリピンの農業専攻科の学生や農業志望の若者を私たちの農場へ受け入れ、日本で本格的な経験を積む場を提供したい。そしてさらにその先の目標として、フィリピン農業者とのネットワークを活かして現地で農業展開をしていけたらと夢を膨らませています。



参加してはじめて 見える景色がそこに

協力隊経験を通して個人的に得たものは、価値観の違いを受け入れるようになり、「幸せのハードル」が下がったこと。精神的にも物理的にもこれがなければ生活できないというモノ・コトが本当に少なくなったと感じます。

小さい頃から漠然とアフリカ志望でしたが、実はこんなに近いフィリピンのことは何も知らず、知ろうとしなかったというのが正直なところ。それが今では年1回は“里帰り”をし、任期中に行けなかった場所やサーフィンを楽しんでいるなんて当時21歳の自分には思いもつかない未来予想図でした。協力隊は参加しなければわからない学びや日本には決して味わうことのできない刺激が山ほどあり、人生のなかでも特別な時間を過ごすことができます。フィリピンを大好きになった私が言うのですから、間違いありません！



細やかなコスト管理で家族経営ながら年間出荷乳量160トンを確保している。

吉田 祐次郎

Yujiro Yoshida

赴任地



ネパール

赴任地での職種
(活動分野)

IT人材育成
(コンピュータ技術)

現在の勤務先・職種

株式会社
プログラマー
日本ルクス
ソリューション
システム

北海道北見市出身。札幌市にある大学の工学部に入り、卒業後はIT系の会社に就職。2012年から2年間、青年海外協力隊としてネパールへ。帰国後は、同じく札幌市のIT系の会社に入り、2016年より故郷である北見市へ赴任している。

異なる文化で得たヒントを 先進のIT事業に還元



ステップアップのため、まったく知らない世界へ

私が青年海外協力隊に参加したのは33歳のときです。当時、札幌にあるIT系の小さな会社でプログラマーとして働いていたのですが、仕事で行き詰まりを感じており、違う世界を見たいと思っていました。そんなときに地下鉄でJICAの広告を見かけて、「面白そうだな」と思ったんです。

当時、自分は中国やオーストラリア、グアムに旅行で行ったことがある程度。青年海外協力隊に参加した知人はひとりもおらず、あまり詳しいこ

とは分かっていませんでした。でも、知らない土地で2年間過ごすというのは、自分にとって大きな転機になるはずだと確信していました。

秋に応募して、合格通知が来たのが翌年の2月。それから訓練を経て翌年の1月に出発。会社を辞めたこともあって、急展開でしたが、家族や友人や職場の皆も「頑張ってこいよ」と背中を押してくれました。私にとって良いステップアップの機会として捉えてくれたのだと思います。

赴任地で 感じたこと

海外との取引を想定した ITのビジネスモデルを構築

私が青年海外協力隊として行ったのはネパールです。現地のグループによるIT分野進出に協力したのですが、ゼロからの立ち上げのため、海外との取引を目指すなどのような事業が向いているかなど、枠組みづくりからの提案が必要で



私の赴任先で開いた、IT産業の今後を現地の人たちと一緒に考えている会。

した。現地にはITのスキルを持った人はいても、その技術を仕事に結びつけるノウハウやビジネスモデルがなかったんです。プロジェクトを進める中では、文化の違いで戸惑うこともたびたびありました。あるとき軽い意見交換会のつもりで人を

集めたら、ホテルを会場にした大規模なイベントになってしまったことがあります。最終的には「どうせなら大きくやろう」と日



私が訪問させてもらったネパール・カトマンズにあるIT企業。



軽い気持ちで開催したらホテルが会場の大規模なイベントになってしまった時。

本大使館やJICAも巻き込み、思いがけず大きな交流につなげることができました。現地では別のJICAの隊員たちとグループを組んで、ゴミ問題の啓発活動も行いました。その一環として学校で子どもたちを相手に劇を見せたのは、自分にとって新鮮な体験でした。

青年海外協力隊を目指す みなさんへ

健康面でのサポートを受けながら、現地の方々と同じように過ごせるのが青年海外協力隊の特徴。参加したらきっと、自分を変える貴重な経験ができると思います。



エスカレーターに 行列ができる街の現状



青年海外協力隊へ参加して良かったことのひとつは、途上国の実情を肌で感じられたことです。知識として知っていたことは、実際に暮らす中で分かることのごく一部にすぎません。毎日計画停電が行われていたり、お湯が出なかったりする生活がどのようなものであるか。街で初めてのエスカレーターが完成したときに行列をつくる人々の気持ちがどのようなものであるか。現地の日常は私にとってすべて非日常なんです。

ネパールについては、JICAのOB会のつながりもあって、帰国後もずっと気にかけています。多くの死傷者が出た2015年のネパール地震の直後には、札幌発のNPO法人「飛んでけ!車いす」の会が行っている、中古の車椅子を現地へ送る活動の手伝いをしました。青年海外協力隊をきっかけに広がった人の輪は私にとってかけがえない財産です。



日本流とネパール流で よりスマートに

帰国後、以前と同じIT系で、途上国への展開も視野に入れている会社に入りました。前職で身に付けた技術や知識も、青年海外協力隊での経験も活かせる理想的な職場だと思います。

海外展開はまだこれからですが、日本とネパールの文化の違いを知る者として、仲介者の役割を果たせることを願っています。

ネパールで学んだことは、自社の運営にも役立っています。今の会社は、私が入ってから3年あまりで社員が10人から30人に急成長しました。その中で私は会社の体制づくりも行ったのですが、そこで既成概念にとらわれない発想ができたのは、ネパールでの経験があったからです。例えば、会社につきものの報告書もすべてが必要なものではありません。日本流とネパール流のふたつの選択肢が自分の中にあることは、仕事をする上で大きな強みだと思っています。



故郷の北見市でIT企業のプログラマーとして活躍している
吉田さん。

渡邊 美希

Miki Watanabe

赴任地



ザンビア

赴任地での職種
(活動分野)

コミュニティスクール
教員・運営サポート
(青少年活動)

現在の勤務先・職種

津別町立津別中学校
教諭(英語)

世界に目を向ける重要性を 子どもたちに伝えたい



ごはんが食べられない子どもが世界にはたくさんいる

私が世界へ目を向けるようになったきっかけは、「ごはんが食べられない子どもが世界にはたくさんいるんだよ」という母の言葉でした。幼い頃に聞かされたこの言葉がずっと頭に残っていたんです。大学進学の際に、英語と日本語の両方の教員資格がとれる学科を選んだのも、外国への興味があったからです。在学中にはカナダやメキシコへ短期留学し、タイやカンボジアのスタディツアーでJICAやNGOの活動の現場を見学しました。国際協力をしたいと強く願うようになった

のは、そこで母の言葉どおりの状況を目のあたりにしたことが大きかったです。

青年海外協力隊には在学中にも応募したのですがこのときは受からず、卒業後は韓国で1年間日本語教師を務めました。帰国後は非常勤講師として経験を積み、2009年から教諭としてオホーツク管内の中学校で英語を教えています。ここで生徒や同僚からの後押しもあって青年海外協力隊へ再チャレンジしました。

北海道岩見沢市生まれ。小中高を小樽市で過ごし、大学では札幌市へ。英語および日本語の教員資格を取得し、2009年には教諭としてオホーツク管内の中学校へ赴任。2014年から青年海外協力隊としてザンビアで活動し、帰国後、現職に復帰。

赴任地で 感じたこと

自分がいなくなっても 現地スタッフで維持できるように

派遣先となったザンビアは私の第一希望でした。貧困問題が気になっていたため、アフリカへ行きたいと思っていたんです。

私の活動の場は、JICAの活動で建設されたコミュニティスクールでした。コ

ミュニティスクールというのは、公立学校にも通えない貧困家庭の子どもが行く場所。ここでドロップアウトするとストリートチルドレンになってしまうというような、教育における最後の受け皿です。

ここで私は、子どもたちに勉強を教えるのはもちろん、学校の運営のサポートも行いました。自分の中での課題は、いかに現地のスタッフだけで運営を続けられるか。JICAからこの学校へ派遣される

のは私で最後と決まっていたんです。

当初は、チョークの補充でさえ1ヵ月かかるというような厳しい状態でしたが、私が現地スタッフを買い出しに連れて行ったり、お金の管理にも教員が参加するところを見せたりすることで、運営がうまくまわるようになりました。



Valentine授業～ごほうびのチョコ配りの様子 放課後学習



センター祭の様子

青年海外協力隊を目指す みなさんへ

帰国してから「私も行きたかった」と言う人とたくさん出会いました。迷っているなら、飛び込んでみたら良いと思います。後悔のない人生のため、貴重な経験のために。



あたりまえとっていたことが
実はすごいことだと再認識



青年海外協力隊への参加を決めたとき、私は学校を辞めようと考えていました。ですが校長に「行ってからあらためて考えてみたら」と言われ、休職扱いにしてもらいました。結果的にザンビアで日本の学校の良さを再認識することになり、復職できる状況にもらったことに感謝しています。

日本の学校はいつもきれいですし、教員はあたりまえのように行事や集金に参加しています。でもそれは世界的にみるとすごいことなんです。異なる文化の中で暮らしてはじめて、チョーク1本にもありがたみを感じるようになり、同じ考えをもった仲間と働けることの幸せに気づかされました。

それに心の間口が広がったと思います。子どもは突飛な行動をとったりもしますが、以前より余裕をもって対応できるようになっていて、異なる文化を知ったことの恩恵だと感じています。



ザンビアとの学校交流を いつか実現したい

国際協力という面で自分にできることはまだまだあると思っています。例えば、NGOを自分で立ち上げて海外で活動したいという気持ちはあります。でもその前に日本でできることもたくさん残っていると最近感じるようになりました。

例えば、日本で感じるのには、海外を怖がる人が多いということです。もちろん情勢が不安定な地域や治安の悪い国は確かに存在します。でも、先入観にとらわれずに自分で判断することが大切で、世界を知ることが自分の成長につながるというのが私の考えです。このことを伝えるため、講演の依頼を積極的に受けるようにしていますし、子どもたちと一緒に考えたりもしています。



ザンビアへ行く前と同じ中学校で英語を教えている渡邊さん。ひとりひとり様子を見ながら授業を進める。

斉藤 育

Iku Saito

赴任地



ヨルダン

赴任地での職種
(活動分野)

養護

現在の勤務先・職種

北海道真駒内養護学校
教員

北海道千歳市生まれ。北翔大学卒業後、特別支援学校教諭と保健体育教諭の免許を取得。北海道小平高等養護学校に赴任。2013年7月から2015年3月までヨルダンに赴任。2016年4月から北海道真駒内養護学校に異動。北海道パレスチナ医療奉仕団に在籍。

《自分ごと》になりました 中東のニュースが



子供好きで教職に、特別制度が赴任を後押し

小さいころから年下の面倒を見るのが大好きで、中学時代に千歳にある障がい者支援施設「いずみ学園」のボランティアに行き、特別な支援を必要とする子どもたちに寄り添う仕事に就きたいと思うようになりました。JICAのことは大学に貼ってあるポスターを見かける程度でしたが、現実を考えたのは教員になってから。国立、公立学校および私立学校の教員が学校に籍を置いたまま協力隊に参加できる「現職教員特別参加制度」がある

と聞き、「私も!」という気持ちになりました。

学生のころからアジアやヨーロッパの一人旅をしていたので、赴任地がヨルダンに決まったときは不安よりも新しい場所に行ける期待のほうが上回りました。赴任地の言葉はアラビア語のヨルダン方言。主語と動詞が一つの単語になるなどの基本を押さえたら、あとは現地で話して覚える体当たり(笑)。最初の半年は苦労しましたが、大丈夫、そのあとはなんとかなりました。

赴任地で 感じたこと

子どもの気持ちに寄り添う ワークショップを開催

私の役目は、ヨルダンのパレスチナ難民キャンプで暮らす障がい児の情操教育でした。知的障がいや肢体不自由の子どもたち、5歳から18歳までの35人に美術・音楽・体育のアクティビティを教えるかわり、教材用具の作成や現地の先

生対象のワークショップも開きました。現地には美術・音楽・体育のカリキュラムがない学校もあり、決して楽ではない待遇で働く先生たちはさまざまな思いを抱きながら頑張っています。どれもすぐに解決する問題ではないと思いますが、それでも軍手をしてボタンをはめて指が思い通りにならない感覚を体験してもらうなど、“子どもたちの気持ちに寄り添うこと

の大切さ”を伝えるワークショップを開いたことの意味はあったと思いたい。生徒の親に対しても子どもたちの頑張りを見せる場をつくりたくて、コーランの暗唱や手遊びを披露する発表会を開いたところ、皆さん喜んでくれてうれしかったです。



青年海外協力隊を目指す みなさんへ

「人のため」と思いがちな国際協力ですが、実際に参加してみると「自分のため」になることばかり。どんな体験も大切な人生の糧になります!



帰国後もボランティアを継続 家庭料理を調理実習で再現



帰国後もヨルダンで出会ったパレスチナ難民との関係を保ちたくて、北海道パレスチナ医療奉仕団のボランティアとして毎年現地に通っています。ガザ地区などにも行って引き続き子どもたちを対象とした活動に取り組んでいます。冬休みや連休を利用していますが、それでも数日間学校を休んで行けるのは、職場のあたたかい理解があればこそ。心から感謝しています。

今、受け持っている子どもたちの手形を持って行って向こうの子どもたちの手形と一緒に教室に貼ったり、ヨルダンの家庭料理、ロールキャベツの中にごはんを入れたメニューをこっちの調理実習で作ったり。私が見聞きしたことを私なりに子どもたちに伝えていけるよう知恵を絞っています。年に1回、北海道大学の留学生たちと協力して北海道パレスチナ医療奉仕団主催のアラビアンパーティーも開いています。



中東の偏ったイメージを 変える発信役に

ヨルダンに行って一番変わったことは世界のニュースに対するまなざしです。世界のどこかで起きていることを“よそごと”ではなく、自分が住んでいる世界の一部として見られるようになりました。

日本が中東地域に対するイメージはきっと、「危ない」とか「怖い」印象が強いと思いますが、そうではない側面があることを積極的に発信していくことも、自分の使命だと考えるようになりました。向こうは5人6人兄弟が当たり前の家族構成で、皆がとても家族思い。ホームレスがないのは国の制度ではなく感情に根付いた助け合いが浸透しているからだとか、女性や子どもがバスに乗ったら男性がすぐに席を譲ってくれるところ、大変な思いをした同じ日にやさしさに触れられる国であることも、北海道の皆さんに伝えていきたいです。



にぎやかな給食時間。一人一人のペースにあわせて完食をサポートする。

齊藤

Akira Saito

徹

赴任地



モンゴル

赴任地での職種
(活動分野)

体育

現在の勤務先・職種

北海道新聞社
浦河支局
記者

モンゴルで見た聞いた思いを胸に 教師志望から新聞記者へ

体育教員の免許とバスケット指導でモンゴルへ

高校時代のバスケットボール部の恩師が、とても情熱的な先生だったんです。一生懸命教えてくださる姿に刺激を受けて、大学は教育学部でなかでもスポーツ指導に特化したコースに進みました。そのままいけば卒業後は新卒で体育の先生に、だったんですが、大学3年のときに青年海外協力隊OGの方のお話を聞いて、気持ちが一気に海外へ。自分のバイト先では賞味期限切れの食品を廃棄する一方で、途上国には貧困にあえぐ子ども

たちがいる。自分にできることはないのかという思いから協力隊に応募しました。当時23歳で新卒の自分は、「どこでも行きます!」という勢いだけがセールスポイント(笑)。赴任先はモンゴル第二の都市ダルハン市の18番学校に決まりました。家族は「日本で社会人経験を積んでから行ってもいいのに」と反対していましたが、私の気持ちが変わらないのを知って、最後は「無事に帰っておいで」と見送ってくれました。

北海道北見市生まれ。山口大学教育学部健康科学教育課程スポーツ健康科学コース卒業後、2010年6月から2012年6月までモンゴルに赴任。帰国後は中学で臨時教諭として働いた後、北海道新聞社に応募。2年越し2度目の応募で2014年7月に採用された。

赴任地で
感じたこと

現場の状況を受け入れながら あきらめない姿勢を伝えたい

18番学校は6歳から18歳までの生徒が約1200人集まる統合学校です。そこで現地の先生と一緒に私が日本で学んだ体育のプログラムを実践する、はずでしたが、モンゴルは政治経済ともに隣国ロシアの影響が強く、学校の授業も教師主導型。生徒の自主性を伸ばす授業への方向転換に、先生方もとまどいがあったと思います。結局は従来のやり方を尊重しつつ、私が一人で裁量できる授業時間を設けてもらい、「南中ソーラン」やバトンリレーなど新たな学びを提供するということに落ちつきました。



バスケット部の練習風景。中学生の男女約50人を指導した。

の方向転換に、先生方もとまどいがあったと思います。結局は従来のやり方を尊重しつつ、私が一人で裁量できる授業時間を設けてもらい、「南中ソーラン」やバトンリレーなど新たな学びを提供するということに落ちつきました。

任期中に作った中学生対象のバスケット部には、左利きで運動音痴の「ムルン」という女子生徒がいました。「休まずに練習



学校から10km離れた家から、部活に一生懸命通ったムルンちゃん(中)と母(左)



卒業式の発表に向け、練習を繰り返した稚内南中の「南中ソーラン」

に来ればうまくなるし試合にも出られる」という私の指導を忠実に守ってくれて、任期中最後の球技大会で彼女、シュートを決めたんです。すごく喜んでくれて、彼女のお母さんからも「娘を応援してくれてありがとう」と言ってもらえたことが一番の思い出です。

青年海外協力隊を目指す
みなさんへ

若さは最大の武器!勢いがあれば、なんにでも挑戦できます。見る世界が変われば価値観も180度変わります。後悔しない体験をぜひ、あなたも!



「日本は“兄弟”だ」市井の
声を伝える職業に開眼



東日本大震災が起きた2011年3月11日はモンゴルにいました。そのときタクシーの運転手が料金を受け取ってくれなかったんです。聞けば1990年代にソ連の体制が崩壊し、モンゴルの火力発電所からロシアの技術者が一斉に引き揚げていったとき、その窮地を救ったのが日本人技術者だったというんです。「日本は兄弟だ。いま大変な思いをしている兄弟からお金はとれない」と言われたとき、こういうことを思っている人がいることを伝えられる仕事をしたいと強烈に思いました。

それとほぼ同時期にモンゴルに赴任してきたシニアボランティアの一人に北海道新聞社のOBがいて、新聞記者という仕事に興味をわいてきたこともあり、帰国後現在の会社を目指すことに。モンゴルに行かなかったら今の仕事に就いていないですね。



協力隊経験プラス
何がしたいのかをPR

帰国後の就職活動で必要なのは、協力隊経験を踏まえたうえで「職場で何をしたいのか」を考えること。自分の場合は、貧困や北海道と海外のつながり、教育などに焦点を当てた記事を書きたいと伝えました。入社後は帯広報道部を経て2016年3月から浦河支局に着任し、船に乗って定置網の現場を見たり夏イチゴ生産者の声を伝えたり、浦河・様似・えりも3町の情報を発信しています。記者として大事にしたいことは、やはりモンゴルで見た聞いたムルンちゃんの頑張りやお母さんの喜び、あのタクシー運転手さんのやさしさが下敷きになっています。現場に立ってはじめて感じる思いや表情を汲み取って的確に伝えられるように記事の精度をあげていきたい。モンゴルと日本のつながりを後押しできる記事も書いていきたいです。



北海道新聞社浦河支局は支局長との二人体制で全分野をカバーする。



青年海外協力隊 北海道 検索

<https://www.jica.go.jp/sapporo/>

独立行政法人 国際協力機構 北海道国際センター (JICA北海道)

〒003-0026 北海道札幌市白石区本通16丁目南4-25 TEL.011-866-8333 (代表)